

2025 年度
外部評価委員会 評価結果報告書

2026 年 6 月
中央大学 外部評価委員会

目 次

2025 年度における評価活動の経過	2
I 評価の全体像	3
II 意見交換に基づく評価結果	5
1. 評定結果	
2. 概評	
中長期事業計画「Chuo Vision 2025」の総括について	
「Chuo Vision 2035」の推進について	
中央大学の諸活動全般について―評価できる点―	
中央大学の諸活動全般について―改善が求められる点―	
III おわりに	13

2025 年度における評価活動の経過

- 2025 年 12 月 3 日（水） 2025 年度第 1 回委員会（オンライン開催）
外部評価委員会（第六期）の活動方針及び活動内容について
審議・承認
- 2026 年 2 月 26 日（木） 第 1 回外部評価委員会と学内関係者との意見交換会
（後樂園キャンパス）
＜テーマ＞中央大学における全学共通・学部横断的な教育プログラムの今後の
展開について
- 2026 年 3 月 12 日（木） 第 2 回外部評価委員会と学内関係者との意見交換会
（後樂園キャンパス）
＜テーマ＞（1）中央大学の研究力及び研究支援体制の強化について
（2）中央大学の大学院改革の実現に向けた施策について
- 2026 年 4 月 16 日（木） 外部評価委員会と大学評価委員会との拡大意見交換会および
2025 年度第 2 回委員会（後樂園キャンパス）
＜テーマ＞中長期事業計画「Chuo Vision 2025」の総括及び「Chuo Vision 2035」
の推進について
- 2026 年 6 月 18 日（木） 2025 年度第 3 回委員会（書面審議）
評価結果報告書（案）について審議・承認
- 2026 年 6 月 29 日（月） 大学評価委員長に対し「外部評価委員会 評価結果報告書」を提出

I 評価の全体像

曄道 佳明（外部評価委員会 委員長）

大学を取り巻く環境は著しく「変化」を遂げつつある。この10年、私たち大学関係者はこの言葉を聞かされ続けてきた。遂げつつあったこの「変化」は、もはや展望や予測を困難にする「変貌」へと様相転換したかのように見える。旧来の大学像を抛り所にした「延長にある改善」の繰り返しでは、学生の期待に応えることも、社会の要請に応えることも、そして何よりも自大学の将来像を描く事すらできない時代の只中にいると言って過言ではないだろう。グローバル化、コロナ禍、少子化、国際情勢の激変、日本経済の行き詰まりなど、大学の変革を迫る強い逆風が常態的に吹き続け、その風の圧力に沈黙し立ち止まる組織は、発展と成長を自ら諦めたかのようにすら社会に映る昨今である。

日本の高等教育が置かれたこのような状況下で、今期の中央大学外部評価委員会は組成され、その活動を続けてきた。これまでの外部評価委員会による評価結果報告書でも度々述べられているように、中央大学の地盤、基盤には確固たるものがあり、伝統ある揺るぎ難い地盤の上で社会の評価を集めている。この実績を鑑みると、上記のような改革の一手、二手を打つことには大きな抵抗感への配慮、異論が噴出する中での決断など多くの労苦を経られたことと容易に推察される。外部評価委員会では、学内関係者、大学評価委員会、大学評価推進委員会との意見交換会、拡大意見交換会を通して、このような事情も含め、そのモチベーション、合意形成、取り組み姿勢、効果検証などを確認させて頂いた。この間、河合学長を始めとした執行部の方々の真摯な対応、事務局の方々の周到な準備や評価委員からのリクエストへの細部にわたる対応に恵まれ、無事にこの報告書を取りまとめる段に至った。関係各位に深い謝意を捧げたい。また外部評価委員会委員におかれても、ご自身の知見、経験を基に、的確な意見、質問、指摘、提案を投げかけてくださり、結果として濃厚な意見交換が展開されることとなった。改めて感謝申し上げたい。

前述の通り、中央大学におかれては、その伝統と実績が豊かである故に、新たな時代に即応する改革を推進していくことにはかなりの困難が伴い、短期にこれを実現することは難しいのではという先入観すらあった。しかしながら、法学部の移転や、多摩キャンパスに成長分野を取り込んだ新たな学部を構想するなど、その取り組みは時機を得た、また時代の要請に応えた、さらには学生のニーズに沿った取り組みとして現在進行形で展開されている。特に「Chuo Vision 2035」において、目的と趣旨を理解しやすく描かれたビジョンに基づき、教育・研究の両面において、立地×学際×実装の観点で新たな指針を打ち出すことに成功した意義は大きいものと外部評価委員会においても高い評価を得た。今後それを推進するために、教学戦略会議において大学組織が一体となって複雑化する教学課題に対応していく、という体制を示したことにも称賛の声が強く上がった。

人材の育成に強みを持つ中央大学として、中大スタンダードを明示し、アイデンティティを高める教育、AI・データサイエンス教育、学部横断型教育、分野融合教育などを展開する構想が示され

ている。これについては、複眼的専門知や実践知を生み出す新たな教育取り組みとして期待が示される一方、それぞれの教育が何を育てるのか、どのような力を育むのか、学生に対して意味付けを明確にする必要があるとの指摘もあがっており、今後の課題として捉えて頂きたい。しかしながら新しい教育への野心的な取り組みは、この時代にこそ挑戦すべきものであり、確立された中大スタンダードへの社会の理解が深まることを期待したい。

一方、挑戦的、野心的とはいうものの、これらの取り組みに対する効果検証について、さらに一層踏み込むことを期待する声も聞かれた。まだ実施して間もない、あるいは現在構想中である大掛かりなプロジェクトが複数あるため今後の課題とも言えようが、学内外にどのようなインパクトを与えることができたのか、学生には何が還元されるのか、中央大学の教育・研究力にどのような変化が生じたのかなどについて、取り組みと同様に緻密なデザイン、指標化などによる積極的な検証や振り返りが期待される。また、急激な入学人口の減少を控える中で、多摩・都心の2拠点体制に対する意味付けをより明確化することが望まれるとの指摘もあった。そのためにも、中央大学らしい全学共通教育や学部横断教育のあり方など、相乗効果とも言える付加価値を本質的価値へ昇華させる取り組みが望まれるのではないかと。さらに、これらの改革を複合的に推進するにあたっては、現場の意識共有の重要性や、大学のミッション、ビジョン、戦略はもとより、大学を取り巻く環境の変化に至るまで丁寧に説明することが求められるとの意見が提示された。

総じて、現在の中央大学の改革的な取り組みには大きな期待が寄せられる。「動く中央大学」のイメージは鮮烈であり斬新でもあるとステークホルダーには映っている。それだけに、今後の「Chuo Vision 2035」の取り組みは、中央大学の存在意義を大きくアピールするチャンスであると同時に、社会の期待、要請に応える重大な責任と向き合いながら推進されることになるであろう。今期の外部評価委員会による評価結果が、この推進に対して何らかのきっかけ、示唆を与えるものとなれば、委員全員の望外の喜びである。

Ⅱ 意見交換に基づく評価結果

【１． 評定結果】

評定平均： 3. 1 7

- S（４点）：１名（大学の諸活動は極めて高い水準にある。）
A（３点）：５名（大学の諸活動は高い水準にあり、取り組みが概ね適切である。）
B（２点）：０名（大学の諸活動は一定程度の水準にあるが、一部の活動について工夫が求められる。）
C（１点）：０名（大学の諸活動には軽度な問題があり、改善に向けた努力が求められる。）
D（０点）：０名（大学の諸活動には重大な問題点があり、速やかな改善が求められる。）

【２． 概評】

第六期外部評価委員会は、2024 年 10 月から 6 名体制で開始し、第六期 2 年目の今年度は、吉武博通委員長の期中退任に伴い、新たに曄道佳明委員長を選任し活動を行った。

今期活動にあたっての基本方針は、「自己点検・評価結果及び中長期事業計画『Chuo Vision 2025』の進捗を踏まえ、大学の諸活動の状況や展望について、校務責任者（副学長等）及び現場の教職員との対話を重視した外部評価を行う」と設定した。本方針は、中央大学が中長期事業計画「Chuo Vision 2025」の振り返りを生かし、「Chuo Vision 2035」を実行力をもった改革とするために、本委員会の評価および意見が活用されることへの期待も込めたものとなっている。

大学側から、2026 年 4 月から「Chuo Vision 2035」に基づく活動が開始されることを踏まえ個別活動に対する意見交換を中心とした評価活動を志向したい、との申し出があったため、大学側の希望に基づき意見交換テーマを設定し、2 回の意見交換会を行った。まず、2026 年 2 月には、「中央大学における全学共通・学部横断的な教育プログラムの今後の展開について」をテーマに掲げ、各学部教育課程における共通性の高い授業科目の全学横断的な開講形態への移行や、文理横断をふくめた全学的教育プログラムの再構築について、率直な課題認識をベースとした意見交換を行った。続く 2026 年 3 月には、「中央大学の研究力及び研究支援体制の強化および大学院改革の実現に向けた施策について」をテーマに、副学長及び大学院改革担当の研究科委員長から示された将来構想の実現に向けた活発な意見交換を行った。

そして、2026 年 4 月には、テーマとして「中長期事業計画『Chuo Vision 2025』の総括及び『Chuo Vision 2035』の推進について」を設定し、大学評価委員会・大学評価推進委員会（学長、常任理事、学部長、研究科長、研究科委員長等）に副学長等を加えた大学執行部と本委員会との間で「拡大意見交換会」を開催した。当日は担当常任理事から「Chuo Vision 2025」の総括が、学長から中央大学のこの 1 年の教学面の取り組みや社会に果たしていく役割、2025 年度より新たに設置された教学戦略会議の検討課題と中長期事業計画との対応等、中央大学の将来像についてのプレゼンテーションが行われた後、意見交換を行った。

以下、今期に実施した意見交換および大学側から示された各種資料に基づき、本委員会委員が提示した評価所見及び意見交換会における意見に基づき、項目毎の概評を示す。

＜中長期事業計画「Chuo Vision 2025」の総括について＞

中長期事業計画「Chuo Vision 2025」は、歴史と伝統を有する中央大学が「グローバルな視野と実地応用の力を備え、人類の福祉に貢献する人材の育成」という Mission の下、全学的な取り組みを展開し、この 10 年で大きな構造転換を遂げる上で重要な役割を果たしたと総括できる。

対外的な視点から見た「Chuo Vision 2025」における最大の成果は、法学部の茗荷谷キャンパス移転であろう。これは高等教育界のみならず広く社会に大きなインパクトを与え、確固たる評価と伝統を有する法学部のさらなる強化に一層の効果をもたらしたことは間違いない。法学部の都心移転により、多摩キャンパスと、後楽園キャンパス・市ヶ谷田町キャンパス・茗荷谷キャンパスおよび駿河台キャンパスを包含した都心キャンパスの「2 拠点体制」が確立され、これにより、「多摩＝総合・グローバル」「都心＝専門・高度教育」という機能分化が進んだと評することができよう。また、法学部移転後の多摩キャンパスの在り方について、中堅若手教職員が主体となった「多摩キャンパス将来構想検討委員会」で議論され、その答申を踏まえて現に新たな学部を設置構想が進められていることは、それまでの組織運営に若手の声を吸い上げる新たな文化を醸成したと考えられる。

2019 年に国際経営学部と国際情報学部の 2 学部を 26 年ぶりに新設したこと、駿河台キャンパスへ専門職大学院を集約したこと、多摩キャンパスにおける国際教育寮の設置等各キャンパスでの新たな教育・研究施設の整備を進めたことも、総合大学としての魅力を向上させ、「積極的に改革に動く大学」という強いメッセージを世に示したと捉えられる。それとともに、留学生受入・海外派遣の拡大や実践的国際教育の強化を通じて、主に国内でその存在感を示していた大学像から国際志向の大学へと転換が進展したことも、今後の中央大学の発展にとって重要な一步であると評価できる。「AI・データサイエンスセンター」、「ダイバーシティセンター」「ELSI センター」など、既存の学部・大学院の枠を超えて、全学的な課題に取り組む仕組みが整備され、今後 10 年の発展の基盤を作ったことも特筆すべき成果である。

その一方で、法学部都心移転から 3 年が経ったが、その効果の学内への波及について十全な検証に至ってはいないように見受けられる。学際領域での連携や融合的取り組みなど、一般的に期待される成果についても内外に提示されたとは言い難い。学内には他学部への影響も限定的であるとの見方もあるようだが、さらに法学部内においてもその効果検証は十分ではないようである。この移転の意義が、単に法学部の地理的不利の解消を目指したものと学内外に認識されぬよう、教育、学術研究の両面における効果検証を行い、発信することが急務ではないだろうか。

「Chuo Vision 2025」において、私立総合大学としての存在意義を深く見つめ直し、大学運営の諸施策をビジネスモデルとして捉え、その効果の実をとる方向付けを示したことは大いに評価すべきである。大学の普遍的価値と新たなニーズを整合させる試みは、従来の古典的大学像を現代に進

化させる野心的取り組みでもあり、より一層の浸透が図られることを期待する。

＜Chuo Vision 2035 の推進について＞

「Chuo Vision 2035」は、「Chuo Vision 2025」の成果を継承しつつ、「文化の創造・発展と社会・人類の福祉に貢献する教育研究を推進し、『行動する知性（Knowledge into Action）』を備えた人材を育成する」を建学の精神に基づく使命（Mission）として掲げ、中央大学が直面する課題や方向性を網羅し、急速な社会変容に対応するための高度な戦略を推進している計画であると高く評価できる。

計画の中でも、大学が自ら Vision として掲げた「創立 150 周年に向けた中大ブランドの継承と新たな価値創造」がとりわけ重要となるが、中大ブランドの確立において、中央大学が社会からどう評価されているか、受験生からどう見られているかを正しく認識することは、少子化という厳しい環境のもとで生命線ともいえる。その意味で、社会や受験生だけでなく、卒業生を含めた「ステークホルダーとの良好かつ強固な信頼関係の構築」を戦略に掲げていることは大きな意義がある。

各学部・大学院における教育・研究の成果だけでなく、法学部や法科大学院を中心とした司法試験合格者数など資格試験における高い実績、企業とのネットワークを活かしたキャリア支援による高い就職実績の維持などから、中大ブランドの社会的評価の高さは依然として強固であるが、10 年後にどのような位置づけになっているかは予測できない。中大ブランドを維持し、さらに高めるためには、教職員が一丸となって「Chuo Vision 2035」を着実に具現化していく実行力が問われるであろう。掲げた Vision の実現に向けて、戦略や計画が妥当であり、矛盾を孕んでいないか、組織の構成員である教職員が納得してコミットできるものとなっているか、教育現場の目線に立つこともまた重要である。

また、国の目指す方向性を捉え成長分野の取り組みに果敢に向き合い、その意義を考察の上でターゲットを絞り、戦略的な新学部設置構想を掲げたことも大いに評価される。2027 年 4 月開設予定のスポーツ情報学部（仮称）が目指す、スポーツを題材にしてデータサイエンスや AI を駆使する教育は、スポーツ振興による全学の一体感の醸成に寄与するばかりでなく、社会のスポーツに対する認識変化を捉えた時機を得た取り組みであり、社会文化への影響も期待される野心的な試みである。2028 年 4 月開設予定の情報農学部（仮称）構想もまた、中央大学の伝統的な強みである「実学教育」を現代に体现するメッセージとして大きな社会的インパクトを与えたと認識している。

大学運営の面では、複雑化する教学課題に全体観とスピード感を持って対応すべく新たに「教学戦略会議」を設置し、学長のリーダーシップの下で機能を発揮する体制を明示したことは、今後の改革の実行において大きな意義があり、変革を加速させることが期待できる。

「Chuo Vision 2035」の計画に掲げ、教学戦略会議において検討を進められる学部横断の共通教育の改革に係る取り組みは、中央大学独自の強みをさらに強化する上でとりわけ重要になると考えられ、学部の専門教育と並ぶ、教育のもう一つの軸として機能することが期待される。日本の大学における共通教育は「一般的な基礎」という印象を与えがちであるが、各大学において設計される

共通教育こそが、大学の個性を発揮する重要な場になると思料する。「予測困難な時代に求められる力を育む実学教育を通じた人材育成」は、中央大学の伝統に根差した説得力のある目標である。全学共通教育として「中大スタンダード教育」の検討を通じて、大学の伝統や実績に礎を置いた、中央大学らしさの現れた共通教育体系が確立され、自校史教育や AI・データサイエンス教育等をはじめ、所属学部に関わらず全学生が共通して身に付けるべき知識・能力等を涵養する体制が整備されることに、大きな期待を寄せたい。

また、研究面の取り組みとして社会実装やイノベーション創出のためのプラットフォームを立ち上げ、研究成果を社会実装へとつなげていく姿勢が示されているが、これは必然的に1つの学問分野で解けない課題にぶつかり、協働する契機を生んでいくことでもある。本取り組みは実学を重んじ、「行動する知性」を備えた人材の育成を掲げる中央大学本来の強みを発揮するものであり、今後の成果を大いに期待するものである。

一方で教員の意識改革や組織改革を通じて、全学的な方針の下で各組織が有機的に連携する研究体制を目指している点は評価に値するが、研究テーマの重点化や資源の投下といった具体的なプロセス、すなわち実現に向けたロードマップの提示については、現時点ではまだ不十分であるという印象である。

この先「Chuo Vision 2035」を実質化させるためには、これまでの成果を十分に検証し、教育現場の教職員、さらには学生もが当事者として参画できるような、包摂的かつ強固なガバナンスを確立することが鍵となろう。「Chuo Vision 2035」は、客観的にはすべての構成員がその意味と意義を理解することが容易な構成となっているが、言い換えれば、構成員の問題意識、関心を集めることができるかが成否を握っているように思われる。中央大学を心から愛する教職員を集め、これまでの野心的な取り組みを継続し、大学の使命である教育・研究・社会貢献をさらなる高みに到達させることが望まれる。

＜中央大学の諸活動全般について―評価できる点―＞

一部は上記と重複するが、これまでの伝統と実績に裏打ちされた社会的信頼と近年の柔軟な変革姿勢、先見性のある施策の融合を中央大学の強みとして評価したい。

・「行動する知性」の具現化

建学の精神「實地應用ノ素ヲ養フ」に基づく理念が、単なるスローガンではなく、教職員の姿勢や実践に着実に浸透しており、課題解決に向けた共通認識が形成されている点は最も評価すべき点の一つである。

・社会的インパクトとブランド力

法学部の都心移転や時機を捉えた新学部の設置構想は、大学関係者はもとより広く社会に対して「中央大学は変わった」という強いメッセージを届けることに成功した。法学部とい

う確固たる評価と伝統を有する看板学部の一層の強化は、中央大学全体の評価向上に大きく寄与しており、卒業生の社会的活躍によって形成された企業とのネットワークを活かしたキャリア支援等により高い就職実績を維持し続けている点も特筆すべき点である。

・先駆的な教育・研究支援プログラム

AI・データサイエンス教育において、「iDS プログラム (Intermediate Program for Data Science and AI)」をいち早く導入した先見性は極めて高く評価すべきであり、テクノロジーを活用しつつ社会課題に対応できる人材育成につながっている。今後は、法とテクノロジーの融合領域が重要性を増していくと考えられるため、この取り組みをさらに発展させ、中央大学がこれまで培ってきた法学教育の強みと、理工学部が推進してきたデータサイエンス教育を融合させることで、学部の枠を超えた、時代を先導する新たな教育モデルが構築されていくことが期待される。また、20 年以上の歴史を持つ学部の垣根を超えた多分野融合教育である「ファカルティリンケージ・プログラムーFaculty-Linkage Programー (FLP)」や、都心 3 学部による共同開講科目など、学部横断教育の先導的な取り組みが継続的に深化を遂げている点も評価したい。

・理系人材育成に向けた先駆的なシフト

国が理系人材育成へシフトしようとしている中、大規模私立大学の理工系学部の動向は大きな鍵を握る。中央大学はこれまで文系分野に顕著な強みを持つ大学として評価されてきたが、後楽園キャンパスの理工学部が 2026 年度に 3 学部へ再編され、2028 年度には多摩キャンパスに情報農学部（仮称）が開設されるなど時流を見据えた改革を進めていることを評価したい。今後、理系分野の教育・研究をどう進めていくか、4 学部をどう連携させるかが非常に重要である。

・堅牢な財務基盤と挑戦的姿勢

財務基盤の堅牢さに甘んじることなく、社会人教育や地域貢献、ステークホルダーからの寄付金獲得など、新たなビジネスモデルの開発に意欲的に取り組んでいる姿勢に今後の期待が高まる。一方、これらの取り組み効果として収益構造にどの程度のインパクトが与えられるかなど、具体的な KPI や指標が示されることが望ましい。

＜中央大学の諸活動全般について―改善が求められる点―＞

中央大学のさらなる飛躍に向け、組織運営、教育改革、広報、各種施策の検証体制等において、以下の課題を指摘したい。

- ・大規模施策の効果検証（IR）の強化

前述の通り、法学部移転という最大の出来事は社会に大きなインパクトを与え、中央大学全体の評価向上にも繋がったが、単なる「地理的不利の解消」に終わっていないか、教育・学術研究の両面における客観的な効果検証を行い、その意義と成果を学内外へ発信することが急務である。この改革によって、志願者数や入学者の学力層、教育効果等にどのような変化があったのか、IRによるデータ分析をさらに進め、次なる戦略策定に活かすべきである。

- ・学部自治と全学的改革の両立

中央大学の伝統である「学部の独立性の強さ」「強い学部自治」が、迅速な全学改革や再編の阻害要因とならないか、いささか懸念される。教育資源が厳しさを増すなかで、教学改革に実効性を持たせ、持続可能な運営を行うためには、各学部を尊重しつつも、これまでの「足し算」の改革に「引き算」を組み合わせることも必要であろう。

- ・全学共通教育の整備とビジョンの共有

「中大スタンダード教育（全学共通教育）」、「全学開講科目」、「学部横断型教育」等の用語が整理されていない様子がうかがえた。教職員がビジョンを正確に共有して、それぞれが目的に適った行動を展開するためには、用語を正確かつ簡潔に使い分けることが不可欠である。重要な検討を進められるにあたり、今後整理されたい。

また、中央大学の良き伝統である FLP は法学部の都心移転により再構築が迫られている。学部の縦割りが強い中央大学においては、「全学共通教育」を教育のもう一つの軸として、全学的に整備・推進することが、結果的に学部の縦割りに風穴を開けるきっかけにもなると考えられる。その際、教員同士の協働だけでなく、学生が学部を越えて学び合う場を意図して設計することが、縦割りを解消していく上で有効ではないか。

- ・教育の国際化

教育の国際化は、150 周年以降もさらに発展する中央大学であり続けるために重要な戦略である。海外大学との連携や英語による授業の拡充は進んでいるが、留学生比率や日本人学生の海外派遣数ではさらなる向上の余地がある。現状を把握の上で、今後、一層の国際競争力強化に取り組まれない。

- ・キャンパスのグランドデザインの明確化

他大学の都心回帰が進むなかで、中央大学の「多摩・都心の2拠点体制」については、グローバル推進などの利点もあるが、学部間連携や学生交流の面では制約となる。また、多摩キャンパスは文系、農学系、スポーツ情報系が併存することになり、多彩ではあるものの学問系統での統一感はない。今後の受験人口の大幅な減少を見据えて、各キャンパスの将来的な学部構

成や定員、各キャンパスの特色といったキャンパスのグランドデザインを明確にする必要があるのではないか。

- ・入試広報戦略の強化

高い教育・研究実績がある一方で、社会や受験生への訴求力は必ずしも十分ではないと思われる。2026 年度入試では、首都圏の同規模大学の多くが志願者数を伸ばしたが、中央大学は微減となった。志願者数の増減は、根底にはその大学に魅力を感じるかどうかという大学のブランド力や教育力が関わってくる。今後の安定的な志願者の確保に向けた広報戦略や附属中学・高校との連携強化が必要である。また、受験人口の激減を見据え、現在の定員を維持することが社会の評価にどう繋がるか、先見性のある判断が問われていると認識されたい。

- ・大学院の定員充足と強化

一部の研究科において収容定員充足率が低い現状がある。志願者は増えつつあるが合格者数が少ない状況の要因分析や、学部・修士 5 年一貫教育の導入検討も含む研究科改組など、高度な専門教育の魅力をさらに高め、大学院進学率の向上に繋がる施策の検討が求められる。

- ・附属中学・高校との連携

少子化の予想以上の加速に伴い、附属校から大学に優秀な生徒が多く進学することの重要性が今後高まるであろう。附属中学・高校が独立採算の体制をとってはいるが、大学と各附属校との関係性の強化については、もう少し具体的に明示されるべきではないか。一貫した教育効果を謳う附属中学・高校との中央大学らしい連携強化は、大学全体の戦略上の強みになると考えられる。

- ・ステークホルダーとしての学生の参画

大学の質保証のため、学生を単なる教育対象ではなく、「大学を共に創るパートナー」として関わらせることが今後求められてくるが、この点において多くの検討の余地があるように思われる。

- ・職員のさらなる活躍と DX・AX の対応

教学改革においては、教学執行部だけでなく、事務職員が IR や DX などの専門性を発揮し、より主体的に力を発揮できる環境を整えることで、大学がさらに発展する可能性がある。

この点で、大学運営における DX 推進や、教育・研究活動や職員の業務における生成 AI 活用の取り組みはまだ発展途上という印象であり、喫緊の課題として対応を強化すべきである。

以上が、外部評価委員会からの提言である。

先の繰り返しとなるが、中央大学は、「Chuo Vision 2025」の下、多摩と都心というキャンパスの2拠点体制の基盤を確立し、社会から驚きをもって注目されるほどの変革を遂げた。これに続く創立150周年に向けた「Chuo Vision 2035」では、歴史と伝統のある大学でありながら、現状に甘んじることなく、時代と社会の難しい要請に応え、大学全体で改革に取り組む姿勢を堅持しており、多摩キャンパスにスポーツ情報学部と情報農学部（いずれも仮称）を新設することを嚆矢として、「新たな価値創造」を目指していくものと認識している。

中央大学は私立総合大学を代表する立場にあり、今後の日本の私学教育の発展を牽引する役割が期待される。この期待感から、中央大学内の環境の改善、発展に留まらず、広く日本の私学教育に常に一石を投じる情報発信源としての役割を果たして頂きたい。

Ⅲ おわりに

村上 雅人（外部評価委員会 副委員長）

中央大学には燦然たる歴史と伝統があり、多くの卒業生が社会の第一線で活躍していることから、人材育成と社会貢献の両面において高い評価を受けている。その地位は盤石に見えるものの、急速な少子高齢化の進展や社会構造の変化のなかで、従来の延長線上にある運営だけでは将来の発展が保証されないこともまた事実である。

このような状況のもと、中央大学は変革への挑戦を選択し、創立 130 周年を契機として中長期計画「Chuo Vision 2025」を策定した。本計画は 2016 年度から 2025 年度までの長期にわたるものであるが、単なる施設整備計画ではなく、少子化、グローバル化、デジタル化といった環境変化のなかで大学の存在意義を再定義しようとする戦略的な構想であり、「世界に存在感のある大学」の実現を目標として掲げている。新学部の新設、法学部の都心移転、グローバル化の推進などを柱とし、建学の精神である「實地應用ノ素ヲ養フ」を現代的に再解釈した改革であったと評価できる。

特に高く評価できるのは、都心回帰と学部再編を大胆に推進した点である。法学部の茗荷谷キャンパス移転は受験生への訴求力向上に大きく寄与し、都心立地を重視する近年の受験市場の変化に的確に対応した。また、国際経営学部や国際情報学部の新設など、新たな社会的需要に応える学部改革を実現したことは、従来の法学中心の大学イメージから脱却し、総合大学としての魅力を高める取り組みとして評価できる。

一方で、「Chuo Vision 2025」は施設整備や組織改革に重点が置かれており、研究力の向上や国際的評価の飛躍的な向上については、なお発展途上であったとの見方もできる。ブランド力向上に一定の成果は認められるものの、世界大学ランキングや研究大学としての存在感の向上については、引き続き課題が残されていた。

こうした成果と課題を踏まえて策定されたのが、創立 150 周年を見据えた「Chuo Vision 2035」である。本計画では、新学部新設等による多摩キャンパスの活性化と、都心キャンパスの利点を生かした教育研究の高度化をさらに推進するとともに、組織構造改革や研究成果の社会実装を重視する姿勢が明確に示されている。18 歳人口減少という厳しい環境のなかにあっても、「50 年後、100 年後にも存在感を持つ大学」を目指す長期ビジョンが提示されており、その意欲的な姿勢は高く評価できる。

教育面では、学部横断型教育や PBL（課題解決型学習）の充実を図り、学生が専門分野の枠を超えて学べる環境をさらに整備することが重要である。また、マイクロクレデンシャルやリスキリング講座の拡充を進めるとともに、生涯学習の拠点形成にも積極的に挑戦していくことを期待したい。

さらに、「Chuo Vision 2035」では、教育改革のみならず、研究活動や社会連携の活性化を含む総合的な大学改革へと視野が広がった点も評価に値する。2026 年には「社会共創推進機構」が設

置され、研究成果の社会還元や社会課題の解決を大学の重要な使命として位置付けている。これは近年の研究大学政策や産学官連携強化の流れとも合致しており、中央大学のさらなる発展を支える重要な基盤となることが期待される。

総じて、「Chuo Vision 2025」は、中央大学が伝統校としての強みを生かしながら改革先行型大学へ転換するための基盤整備計画であり、「Chuo Vision 2035」はその成果を踏まえ、教育力、研究力、社会貢献力およびブランド価値の向上を総合的に目指す発展計画であると評価できる。

今後の成否は、計画を単なる構想に終わらせることなく、いかに実質化し成果へと結び付けるかにかかっている。とりわけ、長い歴史と伝統を有する大学では組織の縦割り化が生じやすく、大学全体が一体となって改革を推進することが容易ではない。この課題をいかに克服するかが、今後の大きな鍵となる。

また、生成 AI の登場や DX の進展は、教育手法の変革にとどまらず、教職員の働き方改革を含めた大学運営全体に大きな影響を与えている。すでに先進的な大学ではデジタル技術を積極的に導入し、教育・研究・大学運営の変革を進めている。中央大学においても、こうした技術を戦略的に活用することが喫緊の課題である。また、AI や DX の活用は、組織の縦割り構造を打破し、部局横断的な連携を促進する有効な手段となり得ることにも留意すべきである。

さらに、中央大学には約 60 万人に及ぶ強固な校友ネットワークがあり、これは極めて貴重な財産である。この強みを生かし、企業や自治体との産学官連携を一層深化させることで、教育・研究・社会貢献の好循環を創出することができるだろう。

しかしながら、改革の成否を最終的に左右するのは「人」である。中央大学で働くことに誇りとやりがいを感じられる職場環境の整備と、相互に信頼し協力し合える組織風土の醸成こそが、社会変革を牽引する総合大学へと発展するために重要である。中央大学という恵まれた基盤に安住することなく、教員、職員、学生が一体となり、教職学協働のもとで「Chuo Vision 2035」を推進していくことが、今後のさらなる飛躍につながるものと考えられる。

最後に、この大学激動の時代にあって、現状に甘んじることなく果敢に変革へ挑戦する中央大学の取り組みに対し、評価委員の一人として向き合う貴重な機会をいただいたことに深く感謝の意を表したい。